

土に眠る(2)

【2】

フランス行きが決まった時、父^{とう}さんはユミを夏目さんという人のうちへ連れていった。夏目さんは父さんの仕事関係の知り合いで、お嬢さんのミサキさんがパリに留学している。それで、何かの時に世話になるかもしれないと父さんは考えたらしい。挨拶に行くなんて、ユミは気が進まなかったのだけど、なにしろ無理を言ってフランス留学を許してもらった後だから、わがまま言わずに父さんの言いなりになっていた。

穏やかなおじさんが、

「うちの娘もたいして面倒見がいいとは思えないけど、何かの時に相談できる人がいれば便利かもしれません。よく言っておきますよ」

と言った。娘さんのミサキさんはフルートの勉強でパリに留学している。日本の音楽大学を出た後のレッキとした留学。ますます気が引ける。

父さんは、

「どうぞよろしくお願いいたします」

丁寧^{ていねい}に頭を下げた。ユミは父さんがこんなに深々と、頭を直角に下げるのを初めて見た。ユミのためなのかしら、それとも相手のおじさんが偉いからなのかしら。ユミは考えて、結論が出なかった。

ユミがパリに着いたとき、思いがけないことに、そのミサキさんが空港まで出迎えてくれた。でもユミの顔を見て、「ふん！」

言^いって頷^{うなづ}いたきり、ニコリともしない。ユミは一瞬どぎまぎしたけれども、とうさんがばか丁寧に頭を下げていたのを思い出して、

土に眠る (2)

「すみません……」

モゴモゴと、口の中でお礼を言った。するとミサキさんは相変わらずニコリともしないで、

「あ、別にあんたのために来たんじゃないから。あたし、この空港が好きなんだ。用がなくても来たいくらい。広々してて宇宙ステーションで感じじゃない？」

その年、つまり一九七四年の春にオープンしてまもないシャルルドゴール空港は、メタリックな灰白色の廊下が巨大なチューブのように湾曲して続いていて、たしかに宇宙ステーションみたいだった。そしてこの娘さんは宇宙人みたい、とユミは思った。

その時ユミは夏期語学研修ツアーに参加していたので、特に面倒を見てもらう必要はなかったのだけど、でも自分のための出迎えがいたのは、やっぱりすごくうれしかった。フランスに着いたら、自分でも思いがけないくらい、細かい気分になっていたのだ。

そのまま真っ直ぐディジョンへ来て、研修グループが帰ったあとも残ったのだった。

女子寮で部屋をもらえて（ふつうは私費の学生は入れないのよお、と事務局の人は言った。この国は、よくわからないふうには自由裁量の利くところのようだ）、静かな生活が始まった。ただ静かというのではなくて、静かすぎてどっしり重たい生活だった。その反面、とらえようもなく軽く、すぐにも取り留めがなくなってしまうような自分に重しをかけるのに苦労した。

そして寂しいというのがどういうことか、初めて知った。寂しさという変なやつ。これはたしかに日本にいたときには知らなかったものだ。いやそうではない。日本でも、寂しいということはよくあった。でも、日本にいるときの「寂しさ」とフランスでユミが感じている「寂しさ」とは、ぜんぜん質がちがう。質だけじゃなくて、もっと根本的に、

土に眠る (2)

原因も理由もちがうのではないかと思う。つまり、ニテヒナルモノ。

日本にいたときの寂しきには、人間の顔があった。誰かが自分から遠いところにいるから、寂しかった。誰かに構ってもらえないから、孤独だった。みんなといっしょになれないから、一人ぼっちだった。寂しいときには、その向こうに人の顔があった。その人や、その人々への思いがあった。寂しきの周りにはいつも人の肌の温もりや湿り気があって、だから寂しきは、いつもどこかでわずらわしさと通じていた。日本では何から何まで、ほんとにわずらわしかった。学校や家庭がやたらにわずらわしかったし、自由になりたいたいとばかり思っていた。ほっといてよ！ と思っていた。それが寂しきと紙一重だった。

ここではぜんぜんちがう。自分をつなぎとめておくものが何もない。誰も気にかけてくれない。クラスだって、外国人むけの特設講座だから、つきつき短期留学の新しい顔

が入ってきて、つきつき出ていってしまふ。誰がいつ出ていったのか、それさえ気づかないうちにいなくなってしまう。ある日ユミが突然いなくなったとしても、誰も気がつかないにちがいない。今だって、いることがわかつているのかどうか、あやしいものだ。すれちがってサリュ！と挨拶するからって、そんなの知ってることにはならないし。

そういうところにいると、まるで自分が糸の切れた風船みたいな気分。そう、まるで、骨がすーっと細くなっているみたい。他の人にはユミが見えていないのじゃないかしら、そんな気になることもある。他の人には見えないんだ、そう思いこんで、透明人間になった気分だ。学生会館の廊下を歩いていたら、チャオ！とイタリヤのロベルトに声かけられて、びっくりした。

そんなある日のこと、ミサキさんが電話してきた。

部屋のドアがドンドン！ 叩かれて、「テレフォンヌ！」

土に眠る (2)

と言われたとき、ユミはどうしよう：、と思った。満足にしゃべることもできないのに電話なんて！ おそろおそろ耳に当てた受話器の向こうから、

「ミサキ！」

低い女性の声があった。ミサキさんのことを忘れてしまっていたわけではなかったけれど、それにしても電話がくるなんて、あまり思いがけなくて声も出ないでいると、向こうは、

「シサツに行くよ」

と言う。またまた何のことか分からなくて、

「シ、シサツ？」

「そう、ちゃんと生活してるか視察に行く。なーんちゃって、ハッハ、うそ。フォワール・ガストロノミックっていうのがあるらしいから、ちようどいい、見に行くことにした。来週の木曜日にそっちに着くから、とりあえず一泊、ホテル予約しといてよ。あんまり高くなくて、あんまり汚

くないホテル。じゃねー」

で、一方的に電話が切れた。

フォワール・ガストロ何たら、いうのは何だ？ それにホテルなんて、どうやって予約したらいい？ ユミはしばし呆然とし、それからパニックだった。心配で夜も眠れないくらいだった。

幸いなことに、次の日の午後、文学部のロビーでイヌ君に会った。それで、事情を話したら、メイン・ストリートから入ったところにあるホテル・デュ・ノールがいいんじゃないかな、と教えてくれて、ついでにそこまでいっしょに行ってくれて、おお、何と！ 予約することができたのだった。

次の木曜日、ミサキさんは約束どおりやってきた。約束といっても、ただ来ると言っただけだから、どういうことになるのかなあと、朝から落ち着かない気分でしたら、昼下がり、寮の部屋のドアを叩く音がして、開けるとミサキ

土に眠る (2)

さんが立っていた。

「ふん！」

またニコリともしないで言ったけど、もう二度目だったから、ユミはびっくりもドギマギもしなかった。知ってる日本人に会えて、とつてもうれしかった。

ほんとなら、デイジョンに住んでるユミが街を案内してあげるべきだったのだろうけれど、実際には逆だった。ミサキさんはフランス語のガイドブックを持っていて、それを読みながら、カテドラルとか、中世のブルゴーニュ公の宮殿を使った美術館とか、市内のレキシテケンゾウブツというのに連れ歩いてくれた。

なかでもカテドラル・サンベニーニュの地下納骨堂はすごかった！ 低い天井を太い石の列柱が支えていて、どこからも外光が入ってこない。どうにか壁にぶつからないで歩けるくらいに仄暗さで、そこかしこの闇から昔の人の魂が滲み出してくるようだ。ううん、きっとそのへんじゆうに漂っているにちがいない。魂は四百年たっても消えないの

だと思っただら、心が毛羽立つような、そのくせシンと静まるような妙な気分だ。

そんな闇の中で、突然ミサキさんが、
「ほーっほっほーっほー！」

変な声を出した。笑っているような、そのくせ妙に神経を張りつめているような声。ユミはミサキさんが頭がおかしくなったのかと思って、ほんものの寒気がした。地下の空気が冷え冷えしてしているせいもあったけど。

狭くて曲がりくねった階段を昇って、地上の広い会堂に出たところで、ミサキさんが、

「うん、この教会は悪くない。とくに地下納骨堂はいいわ」と独り言のように言った。

「教会、よく行くんですか」

さっきの胸騒ぎからまだ完全には抜けきっていないユミは、おそろおそろミサキさんの顔をすくい上げるように見

土に眠る (2)

て、聞いた。

「そ、教会って昔のコンサートホールだからね。いい教会は、ほんとに小さな音でもすばらしい響き方をする」

ユミはむしろ美術館のほうが好きだった。建物は昔のブルゴーニュ公の宮殿で、足音をひそめて木張りの床を歩いていると、まだ十六世紀の空気が残っているみたい。ちよっとカビ臭くて、それでいて温かい感じがする。宮殿というよりは、殿様のお住まいという雰囲気だ。

おもしろかったのは『泣く人々』という象牙の彫刻。すごく大きな柩の上に死んだ殿様が横たわっていて、その柩を担ぐようにして、悲しんでいる人々の群像が取り巻いている。頭に近いところにはきらびやかな法衣をきた偉い僧侶、それから貴族の男女、だんだん足元に近づくと町の人たち。まるで社会階層の見本のよう。それがみんな、思い思いの表情で泣いている。ゆったりした頭巾を目深にかぶって、その陰に顔を伏せて泣いている人もいれば、眼を天

に向けて嘆いている人もいる。その姿や顔つきは、これまでにユミが漠然と西洋人だと思っていたものと違って、ふしぎな土臭さを持っていたけれど、どれも見飽きないほど表情が豊かで、丹念な細工だった。

夕食を食べながら、デイジョンにこんなところがあるなんて、ちっとも知らなかった、とユミが感心すると、

「あきれたね、あんた。それで、なんでデイジョンなんかに留学したの」

とミサキさんは言った。

ほんとに、なんでデイジョンに決めたんだろ。たまたまここで夏期研修があったから。それに地方だと、パリより物価が安そうだった。七三年から為替が変動になって、円が強くなったけど、それでもパリはやっぱりお金がかかる。それにちよっと怖い。地方だったら、東京で下宿暮らしをするのとたいして変わらないかもしれないわ、贅沢しなければね、とママも言った。パリより南だから暖かいんじ

土に眠る (2)

やないか、とも思ってたっけ。それは思い違いだったけど。

「明日はフォワール・ガストロノミックに行くよ」

「何ですか、それ」

「美食見本市。(それも知らないの?、という眼) デイジョンは昔からフランス料理で有名なところなの。ミシュランの三ツ星レストランが二つもあるんだよ。で、年に一回、美食市が開かれるのよ。ヨーロッパ中の名産が集まって、ブツを展示したり、試食もさせるんだって。前から興味あったんだあ。ユミコちゃんがデイジョンに来るって聞いたときは、やったって思った」

そんな話、誰からも聞いたことなかった。それにしても、ユミがデイジョンに来ることを喜んでくれてた人がいたんだ。少なくとも一人は。

次の日、ミサキさんの車で行ったフォワール・ガストロ何とかは、巨大な体育館に売店が大集合したようなものだった。各地のチーズ、大小のソーセージ、一人では持ちき

れないほど大きなハムの塊、ワインの数々、ありとあらゆる食べ物があった。見物人はお祭りの屋台をひやかすように、こっちでソーセージを試食し、あっちでワインのグラスを注文し、気に入ったものがあると自宅用に買ったりしている。

一番傑作なのは、エスカルゴの店だった。

「あれ見てごらん！」

ミサキさんが指さすほうを振り向くと、ちやうど公園の片隅にあるあずまやとでもいった感じの仮設の小屋がある。その壁がせんぶカタツムリの殻で埋め尽くされていて、平らな屋根の上には、全長三メートルくらいもある巨大なカタツムリが一匹、いくらなんでもこれは作り物だと思っけど、デーンと置かれていた。それがいかにも気分良さそうに顔を空へ向けて、目いっぱい角を伸ばしているのだ。お腹の脇には、ビラビラがカーテンのように波打っているし、気のせいかな、丸い眼も笑っているみたい。

土に眠る (2)

入り口からのぞくと、中はお客で満員、うれしそうにエスカルゴの料理を食べている。

「どう？ 食べようか？」

ミサキさんは乗り気の顔で言ったけど、ユミは身震いするように首を横に振った。デイジョンはエスカルゴの名産地でもあるのだそう。粒が大きくて、殻が白いのが特徴だった。それにしたって、カタツムリの殻でできた家の中でカタツムリを食べるなんて、フランス人て変な人たち、そう言ったら、

「そうかなあ、骨だけになってまだ生きてる魚の上で、その魚自身の肉を食う日本人のほうが、よっぽど変だよ」と、ミサキさんは言った。

三日目、コート・ドール・ドールの山地へ分け入った。オートタンの古い教会へ行くのだそう。デイジョンの市街地を抜けるとまもなく、あたりは一面の畑。またしばらく行くと、やがて少しずつ起伏が出てきて、窓から見える景色は林に

なった。坂を上っては下るリズムがまるでシーソーのようで、だんだん眠くなってくる。眼をしばたいて窓の外を見ると、仄暗い林の中の牧場に白い牛が数頭、横たわっていたりする。まるで夢を見ているようだ。

山ふところに抱かれたオートタンの教会は、同じ石造りでも、フランスの町でよく見かけるような先の尖った造りではなく、すべての線が丸みをおびている。ロマネスク様式というのだと、ミサキさんが教えてくれた。浮彫に彫り込まれたキリストや聖人たちは、みな痩せてひしゃげた顔をして、頭を寄せ合っている。衣の襞も、丸くこめた背中も、頬の笑みまでが、波のように重なる無数の細い線に揺られているように見える。それは一見とても幼稚な図柄のようでもあったけど、とても現代的なデザインのようにも見えた。

この人たちはどうしてこんなに疲れたような顔をしているのだらう、とユミは思った。聖人ならもっと元気な、偉

土に眠る (2)

そんな顔をしていてもよきそうなのに。それとも六百年も七百年も前の人々は、こんな諦めきった表情をしていたのだろうか。それは西洋的というより、むしろ東洋的な諦観のにじむ顔だった。その悲しそうな顔を見ると、ユミは気持ちが悪められるような気がするのだった。その人々はデイズジョンの町を歩いていてフランス人たちには少しも似ていなかった。でも同じ土地に根づいたのだから、底の方では通じるものがあるのかもしれない。

教会を出て見渡すと、あたり一帯はゆるやかな傾斜の山並みが果てしもなくつづいていて、濃密な山の気配が身を包み込む。フランスの山は日本の山よりずっとどこかで明るい。

「ああ静かだ。こんなところで自然に埋もれて暮らすのも悪くないかもしれないなあ」

深呼吸をして、ミサキさんは言った。そして、ブルゴーニュの山村で独り暮らしている日本人の女流画家がいると

言った。

「でも、きっと寂しいよねえ、特に冬なんかさあ。死んでから骨を埋めるというなら話は別だけど……」

車に戻って、走り出すと、ミサキさんはさつき言いかけたことの説明をするように、話はじめた。

「去年のことなんだけどさ、パリに骨を埋めたのよお。あたしの母親の先生なんだけどね。あたしの母、昔ヴァイオリン弾いてたでしょ、あ、知らない？ ヴァイオリニストだったのよ、結婚してあたしが生まれるまで。で、彼女の先生の骨をね、パリに埋めたっていうの、その先生のお嬢さんが。それで、まわりまわってそのお世話がパリのあたしのところに来たってわけ」

そのヴァイオリンの大先生は、一度は日本のお墓に葬られたのだそう。その骨をお嬢さんがまた取り出して、パリの土に返して上げたいと言いつつ父はパリが大好きだった、死んだらパリの土になりたいとつねづね言っていた。

土に眠る (2)

た。だから、この骨をパリのどこか、気分よきそうなどころに埋めたいと。

「気分よきそうなどこだったって、パリはほとんど全域が石畳の市街地だからねえ。いくらん何でも街路樹や公園の木根元を掘るわけにもいかないしき。弱ったわよー。それに誰彼かまわず相談できるようなことじゃないでしょ。どこか人間の骨を埋めるのにいい場所はないかしら、なんてそんなこと聞けないもん」

で、さんざん考えて、ブローローニュの森の奥にした。

パリ郊外のブローローニュの森にはまだ手つかずの自然が残っている。きれいに舗装された遊歩道を歩いているぶんにはすこぶる快適で都会的な公園のだけれど、その道はずれてちよっと奥へ分け入ると、もう人跡未踏の状態になる。じっさいにブローローニュで道に迷って、発見されたときは死んでいたという事件もあるくらいなのだ。

「それでね、骨の入った袋を抱えたお嬢さんと、ブローロー

ニュへ行ったの。お嬢さんていったって、うちの母より少し若いだけなんだけどね、彼女といっしょに、あまり人が通らなくなる夕方ごろを見計らって……」

散歩道の横の低い垣を乗り越えて奥に入ると、とたんに本格的な山道になった。傾斜はたいしてないのだけれど、樹の根が盛り上がり過ぎて入り組んで、上がったたり下がったり、歩くのが大変だ。もしや人に見られてはいけないうし、さりとてあまり奥へ分け入ると、自分の方が道に迷って失踪事件になりかねない。それで、少し窪地になって小さな池みたいに水の溜まっている場所があって、その周りは土も軟らかそうだったので、いい加減妥協してそこに決めた。

「あたしは、骨埋めるのなんて気持ち悪くてやだから、そばで後ろ向きになって見張り番をしてた。いま来たほうを睨んで、あっちが出口だって念じながらね。だってブローローニュなんて、ぼんやりしてたら、ほんとに出られなくなっちゃうんだから。あたし、方向オンチだから、すっごく

土に眠る (2)

不安なの、そういう時」

骨は難なく埋まった。らしい。これでパリの土になって、父も満足でしょうと、お嬢さんはさばさばしたように言った。でもミサキさんの心に引っかつかけて離れないものがあった。いや、心ではなくて耳だ。

「その時の音がねー、耳に残って離れないの。シャカシャカシャカって。お嬢さんが穴に骨をぶちまけるでしょ。その時にシャカシャカシャカって音がしたのよ。乾いているんだけど、それでいて妙に湿っぽい重い音なんだ。あたし、それ聞いて、これ、日本の音だなあって思った。日本人の情をいっぱい吸い込んだ音だって」

その音を思い出すたびにミサキさんは、いったんお墓に納められたものを掘り出してまで、なぜパリに埋めたんだろうと考えないではいられなかった。もともとは先生自身がパリの土になりたいと言ったというのだけど、べつに遺言とかがあったわけではない。ミサキさんは、あるときお

母さんに、ふとそのことを言った。お母さんは、それはお嬢さんの嫉妬よ、と言ったそうだ。

こどもの頃、お嬢さんはヴァイオリンの天才少女といわれて、先生の掌中の玉だった。しかし大人になるにつれて、その才能は周囲が期待したほどには伸びなかった。本人は先生の門下から優秀なヴァイオリニストが次々に世に出ていくのを、心に苦く思っていたのかもしれない。それでお母さん、つまり先生の奥さんも亡くなった今頃になって、自分しか知らない場所に骨を隠してしまおうと考えたのではないか。もうお墓には父の骨はありませんからと、そうお嬢さんは弟子たちに伝えさせたという。

「うちの母とお嬢さんとは、いわば同門だからね、人生のいろんな時期におたがい妬ましく思うことがあったのかもしれない。むしろ母のほうがよくいね。母から見ると、お嬢さんという人を解くキーワードは嫉妬なんだ。おかしな話」

土に眠る (2)

ミサキさんは肩をすくめた。そして、「でもねえ、いくら父親が好きだからって、骨まで他人から引き離そうなんて気持ち、私にはぜんぜん分からない。私にとっては父は、むしろ遠くてもどかしい人だった。すまないなって感じもある。小さい頃、母があたしにつきつきりでヴァイオリンのお稽古させて、父のことは放ったらかしにしてたから」

ユミの脳裏に、一度だけ会ったことのあるミサキさんのお父さんの顔が、ぼんやりと浮かんでくる。

「だけどあたしは父親のほうが好きなんだ。いっしょに何かやった記憶なんて、ほとんどないんだけど。でも父のことを考えると気持ちが悪くなるの。母のほうはねえ、彼女から逃げるためにフルートに転向して、結局パリまで来ちゃったようなものだけ」

ナオミはミサキさんがさっき言った「掌中の玉」という言葉に引っかかっていた。「ユミコちゃんはパパの掌中の玉

だから：」とママに言われたことがあったからだ。そのときのママの、変に優しい声音と、眼の端にキラッと光った色を忘れることができない。それはナオミにとって決してうれしい言葉ではなかった。思いがけない言葉でもなかった。日頃の重荷を、もう一度ずしんと背負い直しさせられたようなものだった。

父さんがユミをだいに思っていることは、よく分かっていた。でも、それを重荷に感じるようになったのは、いつ頃からだっただろう。父さんがユミをじっと見つめた日。父さんはとても暗い顔をしていた。そう、ちょうどあの頃から、父さんはどこか暗い目つきで、放心していることが多くなった。それまではすごく明るくて、張り切っていたのに。そしてそのぶん、ユミをかわいがるようになったような気がする。ああ、でもそんなことは考えたくない。いまは考えたくない。

ミサキさんはしばらくハンドルを握って黙っていたが、

土に眠る (2)

やがて気を取り直すように、

「あたしは土に埋められるくらいなら、海に流してもらったほうがいいなあ。海の波に乗って外海に出て、どこまでも漂って行くのって、気分いいじゃない？ どこかの土の隅にカシヤカシヤ埋めれるよりずっとましだと思っけどね」

「で、ある日ミサキさんの骸骨がプカリプカリと浜辺にうち寄せられたりするわけ？」

ユミが言うのとミサキさんは、

「あんた、やなこと言うね」

一瞬ギクリとしてユミを睨んだ。ユミにしてみれば、ミサキさんの大きな眼が沖から陸を窺っているところを想像して、ちよっとおかしかっただけなのだ。ちよっとコミックで、ミサキさんに合ってる。悪い感じじゃない。そんな気がしたのだけど。

ミサキさんは、

「うーん、それはやっぱりまずいかな。はは、考えなくち

や」

「いったん笑いとばしてから、
「でもさ、自分が溶けて限りなく薄まって、地球をすっぽり包むっていう感じ、あたしにとっては音楽そのものなのよね。フルートがほんとに満足できるように吹けたときって、ちよっとそんな感じなんだ。どこまでもピュアな混じりけのない音に自分が溶けて無くなってしまうって、無限に延び広がっていくような気がするの。音になり切った自分が地球をすっぽり包んでしまうような感じ……。そう度々あることじゃないんだけど、でもそれがあるからフルート吹きつづけていられるんだと思う」